

現代の私塾

—人は何を学ぶのか—

「東洋思想」を基盤にした 経営思想、指導者学の雄

—T A O(タオ)クラブ

ジャーナリスト 宮本 惇夫

きっかけは入院中の老子
「ミドル教育」の柱に採用

小田急線の祖師谷大蔵駅から歩いて六、七分。「玄妙館」ビルを会場にして開いている私塾が「T A O(タオ)クラブ」。T A Oとは道教の哲理で道という意味。老子・荘子に始まる道教の中心概念で、この道を守れば不老長寿が得られるという。

このT A Oの名称でもわかるように、東洋思想を基盤にした経営学、指導者学を勉強しているのがこの私塾である。主宰するのは東洋思想研究者であり、経営コンサルタントでもある田口佳史氏。田口氏については、昨年連載「我が人生を行く」のなかで、二回にわたって取り上げたことがある。

日大芸術学部を出た彼は、ジャーナリストを目指して映画会社に入り、二五歳のとき、ドキュメンタリー映画を撮るためタイへ渡った。その撮影の最中、彼は二頭の水牛に串刺しにされるのである。すぐにバンコクの病院に担ぎ込まれたが、もはや絶命かと思われた

ほどの重症で、傷は内臓にまで達していた。幸い九死に一生を得、この世に生還することが出来たわけだが、そのバンコクの病院に入院しているとき、かれは一冊の本に出会うのである。それが老子だった。

「事故は新聞記事になったりしたものですから、バンコクに住む日本人の人たちが本などを差し入れてくれた。ところが読む気にならないし、夜も眠れない。あるとき老子を差し入れてくれたひとがいて、それを読み始めたら眠れるようになった。それが私と中国古典との出会いでした」(田口氏)

日本へ戻ってから怪我の後遺症に苦しみ、雑文ライターをしながら生活の糧を得ていた。そして三〇歳のときに「イメージプラン」を設立、企業を相手にC I(コーポレート・アイデンティティ)企業イメージ統合戦略)支援などの活動を始める。

そして次に始めたのがコンサルタント活動で、ミドルマネジメント層への教育がそれである。田口はいう。「当時、経営者が何に一番悩んでいたかといえば、経営理念や方針が下に伝わらないということ。部長や課長が社長の理念や考え方を理解できなければ、下へ方針も伝わらない。そこでミドル教育を始めたわけです」。

その教育の柱の一つにしたのが東洋思想であった。「老子」から東洋思想に入った田口

だったが、これを本格的に勉強する必要に感じ、あるとき紹介を受けて国学院大学教授の門を叩いたことがある。古典というのは独学ではなかなか身につかず、師が必要である。ところが教授からは「これから古典に取り組んで一流を目指すのは難しい。一年間だけ時間をあげますので、東洋的視点を身につけた上で私のところに来てほしい」という返事だったという。

それから彼の古典との格闘が始まる。論語に始まり、小学、大学、中庸、孟子などの四書五経はもちろん佐藤一斎の言志四録など、東洋思想を学ぶには不可欠な古典を次々に読破していった。

経営者に求められる大局観 三つの視点を養う五つの講座

一九九八(平成一〇)年、田口は一冊の著書を上梓する。「タオ・マネジメント」(産調出版刊)がそれで、いうまでもなく老荘思想をベースにしたマネジメントのあり方を論じたものである。すでにその四年前の九四年から「春秋会」の名で企業の経営層、中間管理職層を対象にした私塾を始めているが、九八年からそれを「T A Oクラブ」と名称を変えて、再出発させた。

同クラブは田口が経営するイメージプランとは別に、一般の経営者や中間管理職層を対



象にした私塾で、五つの講座から成り立っていて、各講座とも毎月一回開かれている。

五つの講座とは①がタオ・マネジメント講義―先端経営論、②が指導者学講義―東洋リーダーシップ論、③が代表的日本人に学ぶ―日本人とは何か、④が老子講義―多様性の時代の思想を読む、⑤が日本の美点を探る―日本とは何か。

TAOクラブを発足させたきつかけについて、田口はこういつている。「これからの経営者に求められる資質は視点の高さであり広さ。つまり大局観をもつということです。では大局観をもつためにはどうすればいいか。それには根源的、長期的・歴史的、そして多様性という三つの視点を持たなければならぬ。その三つの視点を養うための講座が、五つの講座であるわけです」。

例えば③で聖徳太子・持統天皇・徳川家康などの代表的日本人を学ぶことは、長期的・歴史的視点を養うために設けられた講座であるし、④の「老子」講義は物事を根源から見えていくことを狙った講義である。また⑤の日本の美を探る講義、つまり「女性はどこまで美しくなれるか」「絵画はどこまで美しくなれるか」「庭園はどこまで美しくなれるか」

といった講義テーマは、ここから多様性的視点を学んでほしいと主催者側は望んでいる。

ある社長を救ったひとこと「徳とは自己の最善を他者に尽くしきる」

メイン五講座について、①と②が毎月第一水曜日(9:30~12:00)、③と④が第二水曜日(上に同)、⑤が第三水曜日(13:00~15:30)に行なわれている。その他に月一回の土曜講座、夜間講座(6:00~8:00)などもある。

組織は会員制で法人会員が毎月五万円(五講座に最大二五名までの登録が可能。一講座は最大五名まで)、個人会員は毎月一万円の会費で五講座すべて受講可能になっている。

会場はもっぱら玄妙館が使用されている。「以前の会場玄妙館を作ったのは四年前。それまでは貸会場を転々としていた。資料も手元にあり不透明は直ぐに調べがつく。より充実した講義につながっていると思う」。ただ同所は三〇人を超えると使えない。その場合は貸会場を借りている。

現在、会員数は全体で二〇〇〜三〇〇名という。現在、奈良県に住む安納俊紘氏がTAOクラブの門を叩いたのは七年前。帝人から子会社社長になったとき、前任の社長から「これからのためにも入っていた方がいい」と、田口を紹介された。当時、会社は苦境に

あり親会社からは「リストラをやってこい」と送り出された。従業員は「会社を閉めに来た」と彼を警戒し、社員との関係はギクシャクとした。そのとき役に立ったのが、TAOクラブでの勉強だった。

例えば論語にある「民無信不立(民信無くば立たず)」の言葉。リーダーに対する信頼が無ければ、民すなわち社員は一生懸命に働こうとはしない、という意味に通ずる。その言葉を教わった彼は、社員に信頼されるよう働きやすい職場作り、毎日が楽しいと感じられる職場づくりに努力した。その結果、徐々に職場は変わっていき、会社も立ち直ったという。

「徳とは自己の最善を他者に尽くしきる」と一先生に教わった忘れられない言葉です。TAOクラブでの勉強は、組織を動かしたり、経営の判断を下したりする場合など、大変役に立ったことは確かです」

社長は四年間で退き、いまは実家のある奈良で不動産業を営んでいるというが、いまでもTAOクラブを離れたわけではなく、個人会員として月に数度、東京へやってくる。

「幕末には吉田松陰や坂本竜馬などの志士たちは、江戸や各地の学者を訪ねて議論を吹かけ、知識を吸収したりしている。奈良から東京へ出てゆくなど屁でもないですよ」と安納氏は意気軒昂ぶりを見せている。